

<学会レポート>

2023年度医療安全関連学会レビュー

旗手 俊彦（札幌医科大学医療人育成センター）

例年、このスペースでは、医療の質・安全学会のみの報告であったが、今年度は、日本における3つの代表的な医療安全に関連する学会、学術集会等の内容を総論的にレビューすることとしたい。

まず第1の学術集会は、第9回日本医療安全学会学術集会（2023年3月11日～12日、於東京理科大学葛飾キャンパス）である。テーマは「Zero Avoidable harmを目指して」であった。このテーマは、WHOが2021年～2030年のGlobal action planとして掲げた7つの行動目標の1つである。学術集会では、特に、医療安全に関するDXが大きなテーマとして取り扱われた。これに関して、衆議院議員の小林史明氏は、政府に医療DX推進本部を立ち上げ、全国医療情報プラットフォームの創設を進めていることが報告された。他方で、医療施設で導入されている電子カルテがベンダー毎に企画がバラバラであるというDXを進める上での問題点も報告された。

第2の学術集会は、医療安全全国フォーラム2023（2023年11月23日、Zoom ウェビナー）である。この集会は、医療安全に特に積極的な医療施設と研究者とで構成される一般社団法人医療安全全国共同行動が主催し、毎年開催されているフォーラムである。2023年度のフォーラムでは、医療安全における患者・市民参加の重要性が特に大きなテーマとして取り上げられた。医学研究分野における患者・市民参加であるPPI: Patient and Public Involvementは、既に日本でも紹介する学術論文がみられるが、医療安全の分野では、患者とその家族を医療安全の担い手として位置付けるPFE: Patient Family Engagementという概念・メソッドが近年導入されている。これは単に、患者が自分自身の受ける診療の安全に関して関与するのみにとどまらず、医療機関の運営や医療政策形成への参加も含む概念・メソッドである。また、このフォーラムでは、医療安全全国共同行動としての「新・患者安全行動計画」も発表された。

第3の学術集会は、第18回医療の質・安全学会学術集会（2023年11月25日～26日、於神戸国際展示場／神戸国際会議場）である。テーマは、「世界はチームでできている—多様性の森へようこそ」であった。この学会は、規模の大きさ、学術レベルの高さのいずれにおいても圧倒的であり、本邦で医療安全を語る上では欠かすことのできない学会である。第18回学術集会では、例年どおり、医療の質・安全の理論から、さまざまな臨床現場での安全への取組みまで多くのセッションが開催された。その中でも、第18回の特徴は、医療安全に関わる医療スタッフの人的側面のテーマが多く取り上げられたことである。招待講演では、チーム力開発研究所理事の青島未佳氏が、「チームワークの企図となる心理的安全性の作り方～医療現場で一人ひとりが生き生き働けるためには～」と題した講演を行った。また、前橋赤十字病院院長の中野実氏は、「病院におけるパワーハラスメント対策」の演題の下、みずからの具体的な経験を、また、神奈川県立保健福祉大学大学院ヘルスイノベーション研究科の津野香奈美氏は、「医療業界におけるハラスメント発生状況と科学的根拠に基づいた防止対策」と題して、職場内でのパワーハラスメントのみならず、カスタマーハラスメントについてもその発生状況や対策を論じた。

医療安全と医療の質向上に関しては、理論と実践の両面で急速な高度化が図られているとの印象を強く持った。これらの取組みにキャッチアップしてゆくためには、相当レベルのスタッフ、セクションを組織内に用立てなければ、容易ではないとの認識を持つことが有用であろう。